

中世和歌にみる規範性と異端性の相克の解明

—南朝和歌を視座として—

Orthodoxy and diversity of Japanese medieval Waka

— From the point of view of the Nancho Waka —

君嶋 亜紀

Aki Kimishima

大妻女子大学文学部

Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University

キーワード : 和歌, 南朝, 哀傷, 源氏物語, 住吉

Key words : Waka, Nancho, Elegy, The Tale of Genji, Sumiyoshi

1. 研究目的

中世和歌の表現や歌集の構想を古典主義と政治性に着目して分析し、天皇や都という古代以来の権威が変質した中世社会における和歌の機能を考察すること、そのうえで勅撰集を軸に、規範性と異端性という視点から中世和歌史の動態を描き出すことを目指している。そのために二つの転換期の作品——古代から中世に転じた鎌倉初期の『新古今和歌集』と、天皇・都が分立した南北朝期に作られ、王朝貴族社会を基盤とする歌集の掉尾とされる南朝方の准勅撰集『新葉和歌集』(以下、歌集名の「和歌」は省略する。他集も同)——を研究の柱に据え、近年は後者の研究を進めてきた。即ち南朝和歌を〈京都喪失〉〈勅撰集の相対化と勅撰集史の構想〉という視座から分析してその特異性と勅撰集との共通点や相違点を検討し、南朝という異端者の立場から勅撰集の規範性を相対化する可能性を見出してきた。そのなかで当該年度は「哀傷」「住吉」という視点から『新葉集』と勅撰集との比較検討を進めること、新たに〈地方〉〈中世の言説空間〉という視座を導入して、『新葉集』が成立した時代背景や、同時代の他作品・言説との関係に考察を広げていくことを目的とした。

2. 研究内容及び成果

当該年度は研究対象としてきた二つの時代——新古今時代と南北朝期——を架橋する段階に進むため、

- (1) 哀傷歌における『源氏物語』摂取
- (2) 南朝と住吉

(3) 中世の言説空間

という三点を柱に据えて、『新葉集』の分析と勅撰集との比較検討を進めた。はじめに、ここに至る研究の過程と南朝和歌研究の意義について確認する。

京都を失い、行宮を転々とした南朝の和歌には、「都」の喪失による和歌の本意(伝統的な詠み方・約束事)の変容という研究課題を見出せる(拙稿『吉野拾遺』の構想と和歌』『説話の界域』笠間書院 2006年7月)。和歌は現実世界の変化とは距離を置き、王朝貴族社会で育まれた本意を継承することで中世に入っても命脈を保ったとされている。そうした伝統的和歌世界の表現と変化する現実との相克を見出せる点に、南朝和歌を研究する一つの意義がある。また、『新葉集』は従来「准勅撰集」と称されてきたが、近年は南朝の意識では『新葉集』は「勅撰集」を志向したものであった、という認識が広がりつつあり、『新葉集』の勅撰性——勅撰集との共通点と相違点——を検討することが課題になっている。申請者も、中世に頻出する歌語「あらし」を指標として中世勅撰集史の中に『新葉集』を位置づけようと試みている(拙稿「あらしの情景——『新葉集』への一視座——」『東京大学国文学論集』2007年5月)。ここで『新葉集』と勅撰集を比較検討し、南朝という、終末期の疎外者の立場から、勅撰集の規範性を相対化し、勅撰集史を逆照射していく可能性を見出した。

以上より見出した、申請者の南朝和歌研究の視座は次の二点にまとめられる。

A. 京都喪失

B. 勅撰集の相対化と勅撰集史の構想

Aは勅撰集の成立基盤である「都」の喪失という視点から『新葉集』の特異性を考察するものである。以降も、南朝和歌における「都」の多義性——「都」が時に京都を時に行宮を意味する——を見出し（拙稿「南朝和歌の都——『新葉集』宮中の花歌群から——」（『日本文学』2007年12月）、さらに南朝和歌の「都」観が時代とともに変遷するさまを捉え、京都喪失を自覚する『新葉集』撰者宗良親王の撰集意図を指摘した（拙稿「異端の勅撰集——『新葉集』とは何か」（『文学』隔月刊、2010年1月）。

一方、Bではまず、『新葉集』が先行する勅撰集の中でとくに『新古今集』を意識していることに言及している（拙稿「後醍醐天皇と雲居の桜——『新葉集』の撰集意図を探る——」（『国語と国文学』2007年7月）。さらに『新葉集』に特徴的な「読人知らず」詠と旅歌に注目し、『新葉集』と勅撰各集との相違点、および『新葉集』の撰集意図や各巻の構想を考察してきた（拙稿「『新葉集』恋部の読人不知詠」（『国語と国文学』2013年6月）、および「『新葉集』羈旅部の視線」（『大妻国文』2014年3月））。

以上の研究をふまえ、当該年度は、Aでは「住吉」、Bでは「哀傷」という視点から考察を深めた。各々前述の(2)南朝と住吉、(1)哀傷歌における『源氏物語』摂取、に相当する。

(1) 哀傷歌における『源氏物語』摂取

哀傷歌における『源氏物語』摂取（以下「源氏取り」と称する）は、院政期以降、新古今時代にかけて盛んに試みられ、藤原俊成・藤原定家・藤原良経・後鳥羽院等の詠歌がよく知られている。先行研究も新古今時代に集中してきた。申請者は新古今以降の中世和歌における展開を検討するため、十三代集の時代を取り上げ、『続古今集』と『新葉集』に注目して新古今志向や政治性を見出した。

哀傷歌の源氏取りは十三代集にも散見するが、特異なのは『新勅撰集』『続後撰集』で消えていた哀傷の部立を復活させた『続古今集』である。そこには下命者後嵯峨院の歌「雨となり雲となりにし形見にもまがふ桜の色や見るらん」（1447）に列なる形で、当代歌人たちが身近な女性を偲ぶ歌を並べた源氏取りの歌群（1443～1447）が見出せる。歌群末尾に置かれた後嵯峨院詠（上記1447）は、同じ源氏の場面をふまえた、『新古今集』哀傷部に

見える下命者後鳥羽院の寵姫尾張哀傷歌を髣髴させる。『続古今集』哀傷部は、当該源氏取り歌群によって後嵯峨院を後鳥羽院と重ねるといって新古今志向を示しているのである。後嵯峨院歌壇の政治性の強さと新古今志向は従来論じられてきたことだが、哀傷部の構成においてもその志向が見えることを指摘したことになる。

なお、他の十三代集の哀傷歌における源氏取りでは、「煙」「雲」「露」「幻」といった哀傷歌にふさわしいモチーフが用いられていること、東国（鎌倉）関係者の歌に源氏取りが目立つことを取り上げた。

下って南朝の准勅撰集『新葉集』は、撰者宗良親王に関わる源氏取りの贈答歌——宗良親王や花山院長親ら当代の主要歌人が源氏取りにより物語化された文脈で夭折した子を思う歌——を三組入集させている。うち一組は巻軸歌で、『新葉集』哀傷部では源氏取りの優遇が目立つといえる。その背景に、同集が成立した長慶天皇の時代の南朝宮廷における源氏愛好の機運がある。『新葉集』哀傷部の源氏取りは、後醍醐天皇の源氏重視を継承しつつ、『新古今集』を意識したものにとらえられる。

以上の二集『続古今集』『新葉集』に共通するのは、『新古今集』を意識した場合に源氏取りは特異な傾向を示すということである。源氏取りによってその勅撰集を生んだ宮廷の政治的志向が示される——ここに源氏取りの一つの中世的展開を見出せる。これは前述したBの「勅撰集の相対化と勅撰集史の構想」というテーマに新たな視点を加えるものとなった。

以上の研究は論文「哀傷歌の源氏取り——新古今を継ぐもの——」（→下記4）として刊行された。

(2) 南朝と住吉

『新葉集』には摂津国の住吉に行宮を置いていた後村上天皇を軸に、住吉関連歌群が多く見出せる。巻・部立・歌番号を列挙すると、

巻四・秋上・304～307

巻九・神祇・600～603

巻十七・雑中・1153～1156

巻十七・雑中・1178～1189

巻二十・賀・1399～1401

他に、住吉を舞台とした贈答歌（秋上 321・322、釈教 614・615、賀 1423・1424：唱和も含む）や実情詠（春下 157、秋下 339、冬 487：「住吉行宮」で住吉を題材に詠まれた題詠も含む）もある。

なかでも注目されるのは、住吉の海辺の情景を詠む歌の並ぶ巻十七・雑中・1178～1189の歌群で、住吉の沖に遠望できる淡路島の景を詠む五首を中核に置き、後村上天皇の三首を含む。この歌群は後村上天皇の住吉行宮の情景を再現したものにとらえられる。ではこの海の都の情景は『新葉集』の中でどのような機能を有するのか。

当該歌群には南朝三代に仕えた頼意や、奥州を転戦した北畠顕信、後村上歌壇の隆盛を物語る廷臣花山院家賢や歌道家の二条為忠など、後村上天皇とその時代に縁の深い作者たちが並ぶ。また住吉は、南朝が京都に侵攻する際、行宮を置いた地であった。『新葉集』の撰者宗良親王は、後村上天皇の住吉行宮の情景を仮構したこの歌群に、南朝の京都回復の希望を託していると考えられる。

『新葉集』が勅撰集を志向していた、とするならば、この住吉歌群についても勅撰集は比較対象になろう。勅撰集では早く『後拾遺集』に住吉歌群が登場する。同集は住吉社神主である津守家の歌人が勅撰集に入集した嚆矢でもある。下って鎌倉中期、後嵯峨院下命の『続後撰集』と『続古今集』が各々神祇部に住吉歌群を形成しており、以降、二条家歌人が撰者となった大覚寺統の勅撰集では神祇部に住吉歌群が形成される。背景には二条家と津守家との縁も想定される。また住吉は『後拾遺集』の住吉歌群に登場する後三条院以来、上皇の御幸の舞台であり、『続古今集』『続千載集』のような住吉歌群に特異な政治性を示すものもある。

南北朝期に入ると、北朝の勅撰集のうち『新拾遺集』の住吉歌群が注目される。同集は後村上天皇が住吉に行宮を置いていた時期に成立した。南朝に仕えていた当時の住吉社神主津守国量の歌は採らないが、前代歌人詠を並べて住吉歌群を形成している。そこに南朝への対抗意識をみる可能性を考えた。他に、足利義詮作と伝える紀行文『住吉詣』や『太平記』巻三十「住吉の松折る事」も、後村上天皇住吉行宮との同時代性という視点から注目される。なお、『新葉集』は鎌倉期以来の二条家—大覚寺統勅撰集の伝統を継承するかのようになり、神祇部にも住吉歌群を置いている。住吉歌群が北朝と南朝、各々の立場を主張するものとして用いられていることを指摘できる。

以上、勅撰各集と比較しても、『新葉集』の住吉歌群の多さは目に立つ。住吉重視の理由は——撰集資料の問題を措いても——住吉が王権と深く関

わる地であることによると思われる。住吉は、即位儀礼の一環として大嘗祭の翌年に難波津で行われた八十島祭の祭場となった。また、住吉神の導きを語る神功皇后伝説や、須磨・明石から帰京した光源氏の住吉詣（『源氏物語』漣標巻）という王権獲得の物語——京都回復を願う南朝にとって望ましい物語——を喚起する地でもある。

住吉という地のもつそうした機能は、『新葉集』撰者宗良親王も意識していたと思われる。同集は全二十巻の巻軸近くに後村上天皇と当時の住吉社神主津守国量が住吉行宮で八十島祭について唱和した歌を置き、その後三種の神器を詠む後村上天皇詠二首を置いて全巻を閉じる。八十島祭と三種の神器により南朝の正統性を主張するような終幕である。また実際、前述のように住吉は後村上天皇の正平七年（1352）、正平十五年（1360）と、南朝が大和や河内の山中の行宮から京都侵攻に向かう際、まず駒を進めた地でもあった。住吉は物理的にも象徴的にも京都回復を想起させる地であったととらえられる。『新葉集』に散在する後村上天皇の住吉行宮の情景は、南朝の京都回復の希望を象徴するものと考えられる。

以上、住吉歌群をめぐる『新葉集』の意図と政治性、および勅撰各集に見える住吉関連歌群の展開と変容、『新葉集』との比較検討について、論文『新葉和歌集』の住吉歌群（仮題）にまとめ、投稿準備中である。

3. まとめと今後の課題

以上、(1) 哀傷、(2) 住吉、という視点から『新葉集』の分析を進め、勅撰集史における位置づけを検討するとともに、南朝が生んだ准勅撰集という異端的な立場から勅撰集史を見渡し相対化することを目指す研究を進めた。その過程で、南朝をめぐってさらに考察を続けるべき課題として、

C. 地方

D. 中世の言説空間

という視座が浮上してきた。

Cでは行宮を拠点とし地方を転戦した南朝歌人の歌に「吉野」や「住吉」以外にも注目すべきものが見出せないか、また実体験に根差した地域性が見出せないか、勅撰集等と比較しつつ考察する。まずは行宮の置かれた大和周辺と宗良親王が転戦した東国の歌枕の抽出、検討が課題となる。その過程で東国詠を多く収める宗良親王の家集『李花集』にも研究対象を広げていく。

Dは『新葉集』恋部の読人不知詠（2013年、前掲）や今回の（2）等で試みてきた、『新葉集』所収歌と中世の歌論歌学との関連性を探る方法で、2で当該年度のテーマ（3）として挙げていた。今後も『新葉集』所収歌のうち解釈に揺れのある地名や、南朝の朝儀復興への関心を示す年中行事詠に注目し、中世に流布していた歌論歌学書や諸注釈書、有職故実書等に見える言説との関連性を探っていく。これは南朝和歌を特異な存在として孤立させず、中世の知的世界との関連の中でとらえ

ようとする試みで、南朝和歌研究の視野を広げるものになると思う。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

- [1] 君嶋亜紀「哀傷歌の源氏取り——新古今を継ぐもの——」（『大妻国文』査読無し，47号，2016年3月，pp71-93）
- [2] 君嶋亜紀『新葉和歌集』の住吉歌群（仮題），投稿準備中

（2017年3月31日現在）